

と成った自覚であるが、同時に、その「わたし」を、救いから疎外された無学破戒の衆生の生に重ね合せ、「そくばくの業をもちける身」の悲惨さを深く内省し、痛感したのでもある。故に親鸞の「いづれの行もおよびがたき身」の自覚は、すべての人に罪の自覚の境地へと至らしめるものではないだろうか。

第一結集における阿難

——有学から無学へ——

龍口明生

はじめに 第一結集は五百人の比丘が集まり、法と律とを誦出し編纂した。ここでは第一結集開始に当たつての、阿難のおかれた立場について考察する。諸律蔵の中の第一結集の記述では阿難は未だ有学であり阿羅漢ではない、という理由で結集の指導者である大迦葉より最初は参加することを拒否される。

このことを聞いた阿難は精進し解脱を得、阿羅漢となる。阿羅漢になった時点で参加を許され、結集が開始される。この点から言えることは、阿難は出家し、やがて釈尊に給侍し、多聞第一となり、釈尊入滅後に至るも、その間ずっと学地にありて、阿羅漢になることは無かった。阿羅漢になったのは第一結集開始直前のことである。ところで後世の成立である大乘經典においても、それが釈尊の説かれた「仏説」という構成をとっているならば、そこに登場する釈尊をはじめ他の人々、仏弟子、すくなくとも比丘達の作法等は律の規定に準じたものとなるのが自然であろう。この観点から諸律蔵をはじめ、諸經典、特に浄

土三部経中の阿難の描写を検討し、その相違の原因は何かの手掛かりを得たいと思う。

一 諸律蔵の第一結集開始の直前、直後の阿難

諸律蔵の叙述が必ずしも全く一致するわけではないが、現存律蔵の多くは、阿難が阿羅漢になったのは第一結集(五百人結集)の直前であり、摩訶迦葉により第五百番目の阿羅漢として結集への参加が許されている。現存の律蔵は同様にこのことを伝えている。①『四分律』『集法毘尼五百人』(大正22, 966c-967a)に於いては、大迦葉は比丘四百九十九人を選んだ。彼等は「皆是阿羅漢多聞智慧者」であり、他の比丘達が阿難を数に加えるよう提案するも大迦葉は「阿難有愛悲怖癡。有愛悲怖癡。是故不应令在数中」という理由で拒否する。そこで阿難は精進し無漏解脱を得、「時阿難得阿羅漢已」のである。そして阿羅漢として結集に参加が可能となる。②『五分律』『第五分之九五百集法』(大正22, 190b-c)も同様である。③『十誦律』『五百比丘結集三藏法品』第一(大正23, 447b)も同様に四百四十九人の比丘は「皆得共解脱」ているが、阿難一人は学人である。学人ではあるが、長老大迦葉は「是阿難好善学人」であり、仏は「阿難多聞人中最第一」と説いているので結集に参加させることを提案している。この点他律の記述とはやや相違しているけれども、後には「五百阿羅漢」と言う表現がなされていて、一貫していない。④『根本説一切有部毘奈耶』『雜事』卷第三十九(大正24, 403c-404a)⑤『摩訶僧祇律』(大正22, 491a-b)及び、⑥『ヴィナヤ』においても阿難は有学であったが、精進して阿羅漢となっている。

二 諸經典における記述

例えば『悲華經』卷第一「転法輪品」第一(大正3, 167a)に於いては阿難は阿羅漢では無いことが明記されている。「如是我聞。一時佛在王舍城耆闍崛山。與大比丘僧六萬二千人俱。皆阿羅漢諸漏已尽無復煩惱。一切自在。心得解脫。慧得解脫。(中略)唯除阿難。」とある。

三 浄土三部經における記述

無量壽經は五訳共に、阿難は阿羅漢である。『佛說無量壽經』(大正12, 265c)を例にとれば、阿難も他の比丘達と同様に阿羅漢である。「我聞如是。一時佛住王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆萬二千人俱。一切大聖神通已達。(中略)尊者阿難。皆如斯等上首者也。』『佛說阿彌陀經』(大正12, 346b-c)及びその異訳も同様である。但し『觀無量壽經』(大正12, 340c-341a)では「如是我聞。一時佛在王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆千二百五十人俱」となっているのみで明白ではない。

大乘仏教教団の連帯感

——「善男子善女人」の原意——

阿 理 生

大乘の諸種の經に、bodhisattva(菩薩)と並んで、しばしば kulaputra, kuladuhitṛ(漢訳 善男子、善女人/族姓子、族姓女)の語が見える。これらの用語に関して、近現代の辞書的記載や解説のほか、平川彰の研究(『平川彰著作集第三卷』平成元年所収)や植木雅俊の研究(『仏教のなかの男女観』平

成十六年所収)があるが、その本質的概念について充分に解明されたとは言い難く、まだ研究の余地があるようである。

初期仏教パーリニカーヤには、アンバッタというバラモン青年のことを仲間のバラモンが kulaputta と言うとき、その語は前後の文脈からして、古代インド世俗社会の厳格な階級差別と密接に関わっていることが知られ、この場合 akula という卑しい下層階級集団との対比で、kula (= sukula) という高貴で良きバラモンなる上層階級集団が意図されている(PTS版 DN.1, p. 93)。そして一方では仏陀を師とする出家者集団(サンガ)に属する者もまた kulaputta と呼ばれているのを見出す(MN.1, p. 161; p. 205; MN.3, pp. 269-270. etc.)。

同一の kulaputta の語が在家者にも出家者にも使用されていることになるが、その意味合いは同一ではあるまい。後者の出家者には上層のバラモンから下層のシュードラ階級の出身者までが入門を許され、出家前の階級(生まれ)が問われることはないから、出家者に対して言われるところの kulaputta とは、世俗の差別的社會階層における意味を離れて、「(仏陀を師とする出世間の)すぐれた出家者集団に所属する者」の意味合いに転用されていることが明らかとなる。kula は基本的に「家柄・家系」のことではなく、「同類の群れ・階層集団」であるからである。「英語の clan はこの kula と類縁関係にある可能性がある」

大乘の始原に位置する『八千頌般若經』では、出家の比丘・比丘尼と在家のウパーサカ・ウパーシカーという四衆が直後の文脈で kulaputra, kuladuhitṛ の語に言ひ換えられ (Vaidya